

竹野蒲河内物語

何代かの祖父たちが語りついだ哀話

吉田勝一
蒲江町
竹野蒲河内

(縦合のことは)

さる日、私は蒲江新高海岸の彼方、元猿の高令者の集会に出
席したところ、八十歳の吉田老が、かぎり長文の伝
承物語を書き写したものを見た。若干の校訂を加えて抄ることにし
た。まだお許しを得てのことである。

(羽柴)

入津湾を船で沖に出ると、豊後水道が果てしなく広
へているが、陸上からも尾浦に通ずる小駿津から大駿津
へのあたりから展望は、また格別である。この入津の
海の片隅に、今から數百年前の歴史物語が語りへがれて
いる。それは城跡があるとか、戦いがあつたとかで、は
でやがて後世に語り伝えられるようなこととちがい、大
望をもちながらついに果すことが叶わず、哀れき秘めた
物語りである。

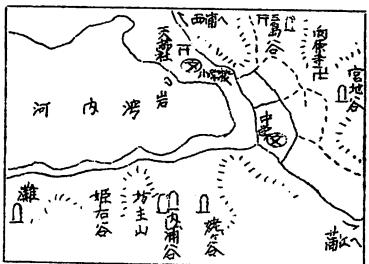
時は源平合戦の昔、秋去けむわの頃日も傾いた七つ時
(午後四時頃)、入津湾を塞ぐようにはいつて来た船団があ
つた。一見驟然と見えだが、日が経つにつれ、浦辺の人々
々と見馴しくなり、船に積んでいた漁具を見て、同じ漁
師と思いこえ、互いに交遊を深めていた。ところが事実は全くちがつた人々で、先年源平の戦い
に源氏方に味方し、武勲をあげた武士の一団であつた。
その目的は、昨年壇の浦で平氏を滅ぼせ、按群の手柄
をたてた源義経が、兄頼朝の手の者に追われ、九州に落
ちていると伝えられるので、その義経に協力することと
である。

あつた。しかし四国を出発する間際にあって、義経は奥
州へ追われたとかうわさを聞いたので、その真相を探る
うと、この入海下鋪をおろし、二人ばかりを豊後表(太分)
まで探索に出ていたのである。

この一団の長は四国の豪族、加久屋新左エ門といふ。
四国ではその人ありと知られ、智勇人に勝れず武將であ
つた。世の友とえど、人情より薄しという言葉がある
が、この加久屋新左エ門は、もともと源氏の扶持など愛
けていたが、たまたま先年義経に呑され、君主と仰
いだ間柄であつたが、頼朝公の仕打ちに義経をふびんに
思ひ、生来の義侠心が燃え、自分にできる限りの力をつ
くして、莫大な軍資金と兵船を率いて、大望の船路をこの
地までたどつたのであつた。新左エ門にしてみれば、
義経の勢威をもつてすれば、九州を平定するはまくたく
間のことと信じていた。

さてこの新左エ門には一人の娘があつた。父母に下で
賢く、容姿器量また人にすぐれ、歳も二十の花盛りで、
その夫と定めた人物は清藤といひ、智勇人に秀で、豪勇
無双と評判の若武者であつた。まだ婚礼の儀式はしない
まゝの夫が、父新左エ門も許した仲であり、式の滞つて
いたり及主居義経から救済を乞う親書が届いたので、昼夜無休の多忙のためであつた。

そこで仮祝言をあげて出發となつた。娘は亡き母の墓
にまといり、この度の事情を報告し、親戚や里の人々に別
れを惜しまれ、はじめて入旅路についた。ところが新左
エ門は旅の劳苦が重すぎてか、当地につくと程なく病気
となつた。清藤は心を痛め、部下とつれて娘が父親と
娘を守り、波静かな湖内に入江に船を着け、内浦谷に仮
屋をしつらえ、医師と呼んで薬をすすめ、看護下物とい
毎日であつた。



しかし殿新左工門の病氣は一向快方に向らず、薬をすすめても効がなくなりで、佐伯の方から名医を迎えて診察を受けたところ、はじめてそれは咳(ろうが)——今か肺結核であることが判明も用事以外には殿の病床へ及近へがくようになるとの注意であつた。

清藤は止むなくその旨を主君に報告すと、新左工門は「あが志を果せず、我念至極である。そちはわだしに代り、主君義経様のご消息知れ次第駆けつけ、きつと涙ながらの依頼である。清藤は「殿、その心配は無用であります。義経様のご消息知れ次第駆けつけ、きっと父上の分共ご奉公いたしす。どうか医師の言葉にしたがい、気長へのんびりと保養が何より。お心丈夫に」と且つはなぐさめ、且つは励ますのであつた。

豈後表へかわいた探索の者が立ち帰つて報告によると、豈後表にはすでに鎌倉の命をうけて大友氏が入り、すでにその勢力を拡げて、もうどうにもならないとのこと、早速清藤が病床の父新左工門に伝えると、新左工門は義経公の不運と自分の懲卒をなげき、清藤に向つて、「何事も天命である。そちた方夫婦は四国へ帰るよう。お部下には金をわきち、妻子の許に歸すよ。すべて自由の身にしてやるがよい。」との切なる願いの言葉である。

しかし、部下達のほとんどは、疲氣の主君を捨てて立ち去ることを承知しない。そこで清藤は部下たちに命じて、大坂から大量の漁具を買い求め、昨日までの軍船を漁船に利用させ、漁業のかたわらこの地方の土地を開拓せることにした。

新左工門の病氣は、清藤夫婦の手厚い看護も、また部下たちの切なる念願も空しく、ついに不帰の客とはなつた。清藤夫婦はねんごろに平いきすませ、意を決してこの地に残ることとした。そして部下たちにも地元の女と縁を結ぶことをすすめた。部下たちがこれにしたがい、清藤と主君と仰ぎ、自然大岩主の形となつて、此の地は次第に繁榮の姿となつた。

その後しばらくして、どうも娘の健康がすぐれない。医師を呼んで診てもらつたところ、亡父新左工門とおなじ病氣であるという。清藤はその宿命を嘆いたが、心を励まし、医師の言うままに養生きつづけた。

ある日、娘は夫清藤に向ひ、「私ら親子があなた様に受けた御恩は、死んでも忘れませぬ。私が死にまつたら、どうがよい奥方をお迎え下さい。私どもは娘かい夫婦の縁でございました。お父大様の妻となり樂しかったことと思えば何一つ悔いのない身であります。」と、取次して行くことか何よりの心残りでござります」と、取次すがつてつまびき。清藤も切なく胸にせまつたが、泣きおきえ、「何を言つぞ。医師は先日だいぶよくなつてゐると言つていただき。俺も喜んでいるのに——」と、叱りつけるように励ましはしたものの、清藤の心中は切なくなつてゐた。

それから幾日なく、娘は死んだ。清藤も部下たちも打ちつづく不運と嘆きながら、懇ろに葬儀をすませ、亡父の墓に並べて葬つた。しかし清藤はこれをそのままここに残して立ち去るに忍びず、意を決じて思ふ出ふが河内へつまでも居住することにきめ、内浦に草庵を営み一人の僧と住まわせて、亡き父娘の菩提を吊らわせることとした。この内浦の寺は、四五百年前にいたと伝えられている。



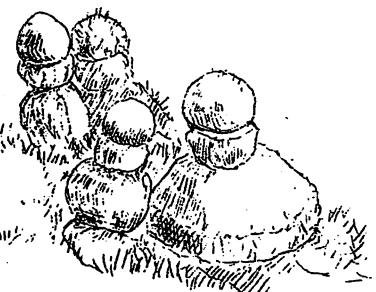
清藤は三崎谷に人々のために寺を建立し、部下を励まして人々に入津湾の浦々へ開拓を進めた。人々は清藤を主君と仰いだ。その後部下たちの懇望と容れて、清藤は地元の大よどが女とめどり、二人の男子をもうけた。名前を、先は道寿(どうじゆ)弟を道円(どうえん)と名づけ、夫婦共心を含せて愛育した。主君親娘(ちやうしんじやう)の子供は父祖の血をうけて嚴く育った。主君親娘の命日には清藤は大よどと共に内浦寺に参詣し、僧に頼んで特別に読経させてその冥福を祈った。

この道寿、道円二人の兄弟の豪傑説は今も村に語りつかれている。その一つ。
明治の末頃まで、河内には不思議とされていた骨つぎのまじない、かつば物語があつた。
ある晩、道寿が便所に入っていたと、何者かの手が道寿の尾にさわる。道寿が素早くひつかんで引きあげようとしたら、その手がすっぽ抜けた。道寿はそのまま手を持って部屋に帰り、それを戸棚の中にいれていった。
すると、それから毎晩のように「手をくれ、手を返してくれ」と、窓の外からのなげき声である。取りあわすにあると、七日目の晩、「今夜返してくれないか、手がつななくなる。手を戻してくれれば何でもかなえる」と訴える。そこで道寿は、この村の人には一切害をしないといふ証文を書かせ、庭先の太石を指さし、「この石が朽ちてなくなるまで」という約束をし、その石を印として海に投げ入れ、証文とまじないの品(薬)を受けとった。その証文がずっと某家に伝えられ、約束の印の大石は、河内小学校の後の海で、今も波に洗われている。

まことに言ひ伝えは、住居を建てておたり、兄弟二人が山から大木をかづぎ出すこととなつた。後をかづいた兄の道寿が声をかけた。「道円、重くはないか」と答えた。見ると弟は「重くはないが、足がぬかる」と答えた。見水皮堅い地面に道円の足はぬかるこんでいた。それほど力が強かったという。今どきの者は想像できぬ話である。いずれにしても兄弟とも無双の豪傑で、今尚残る道寿が投げ込んだという大石を見ておわかる。

清藤の家は大きすぎる邸宅で、まだ今も宮地谷にあって、三十人あまりの百姓をかかえた大家族で、一同お家大事に奉公し、四百年ほどにおたつて大名主の形で續いていたという。しかし、一度大火でかかり家を焼いたので、大切な品物をほとんどなくしたそうで、それらの中には加久屋新左衛門が、源義経から貰つた手紙もはいつてある。

さて、当時の人々の住居の場所や通路などどこであつたか。恐らく今の村の住宅地は昔はほとんど海であったことが考えられる。昔からの言い伝えによると、康寧



「三島谷の五輪塔群」

草ぼうぼうと荒れた畠の木、石垣にせよ無縫作に積み重ねられ、それが昔がつき、へや草がからんでゐる。この伝承物語には連なる人の墓ではあるまいか。

以上で伝説は終りおけであるが、加久屋新左工門の墓は内浦谷に、娘の墓は娘右谷に残り、道寿、道田の遺跡は宮路谷に残っている。尚内浦寺跡には、何かがあると言ふ伝もある。

この説は明治三十八年頃、当時八十歳を越した老人が私の祖父に話してくれたもの、その老人も子供の時その祖父が、子供の時祖父から聞いた話の受けつけで、正確な材の歴史というわけにもいくまいが、ともかくも今からざつと七八百年前にやがてある昔物語である。へおあり

いすれにしてもこの地には、戦争の目的でやって来た加久屋、清藤の一族がやつて来たが、はじめの目的を果たすことができず、しづかにこの地に住みつき、かつての軍用金も殆んどこの地での生活に使われたものと思う。しかし、これといって大きな遺跡がないのは、世を忍ぶ人となり、ひそやかに生活していたからではあるまい。が普段からちあちこちに五輪塔などがあつたようだが、墓の中下埋もれたり、細の開墾整理などで、今は殆んど失つてしまつたようである。

以上で伝説は終りおけであるが、加久屋新左工門の墓

河内の伝承を支持する 羽柴弘
— このような古跡が残つてゐるから —
私は近ごろ立回りに竹野浦河内歩きをして、前掲の吉田老の物語で調査する古跡探訪を重ねた。そのポイントを、簡単に並べて見よう。

(1) 三島谷の五輪塔群

附近は古の時代の集落のあったところと思われる。谷あらがる土地が広く、谷水が豊富である。

(2) 道寿が海に投げ入る左岸 小舟橋の裏の磯にある。初めは度根の門の近く、波うち際に直立の形であつたとき移されたといつ。

(3) 宮路谷の石の祠

吉田老は、これが道寿道田兄弟をまつらうのであるといつ。祠の姿はさほど古くなく、文字も何一つ書かれてない。しかし、ハムカリオサ祠である。

(4) 内浦谷の印塔

度根だけではあるが、道がまがり角、煙の閣である。様式は古く、室町時代の宝篋印塔である。庶民の供養塔とは思られない。

(5) すぐ近くの二つの五輪塔 蜜柑畑の石垣の中には基、はなこまれたうな格好で並んでゐる。一つは一メートル、一つは九〇センチほど、大体が兄弟の墓とと思われる五輪塔である。これは一般百姓や漁師の墓とは思えない。

(6) 瀬の長瀬家裏の五輪塔群

木立の中へ地輪五、水輪四、火輪五ほどか、ちぐはぐではあるが、長瀬家がてへねにてまつてゐる。この墓についての伝承は全くない由であるが、水輪が最大なのは、直径が六〇センチほどある。これで五輪十輪とも言ふ。六〇ほどのは、らへも六〇にする。室町時代初期あたりはまだ少くともかほる分ではないか。これも庶民の墓とは思えない。

(7) 地名について

焼が谷、娘右が谷なども何がどうよろもと考えられる。(まだ外に生あるだろう。)以上が、河内伝承の裏付けになるものではあるまいか。